

どこかに生きながら

小川未明

青空文庫

子ねこは、彼かれが生まうれる前まえの、母ねこの生せい活かつを知しることはできなかつたけれど、物もの心こころがつくと宿やどなしの身みであつて、方ほう々ぼうを追おわれ、人にん間げんからいじめつづけられたのでした。母ねこは、子こ供どもをある家いえの破やぶれた物もの置おきのすみへ産うみ落おとしました。ここで幾いく日にちか過すごすうちに、子ねこは、やつと目めが見みえるようになりました。そして、母親ははおやの帰かえりがおそいと、空あき箱ばこの中なかから、明あかるみのある方ほうを向むいて、しきりとなくのでした。もし母ねこが、その声こえをききつけようものなら、急いそいで走はしつてきました。そして、箱はこへ飛とび込こむや否いなや、子こ供どもに乳ち房ぶさをふくませたのであります。

しかし、ここも安住あんじゆうの場所ばしょでなかつたのは、とつぜん物置ものおきへきた主人しゅじんが見みつて、大おおいに怒いかり、

「いつ、こんなところへ、巢すを造つくつたか。さあ、早はやく出でてうせろ！」と、ほうきで、たたき出だそうと、追おいたてたからでした。あわれな母ねこは、あわてながら、かわいい子こ供どもをくわえて、逃にげ出だすより途みちがなかつたのです。空あき地ちをぬけ、林はやしのある方ほうへと、いきまし

た。そこには、小ちいさな祠ほこらがあつて、その縁えんの下したなら、安あん全ぜんと思おもつたのでしよう。けれどそ

こは湿気しつけにみち、いたるところ、くもの巢すが、かかつていました。それだけでなく、野良のら犬いぬの隠れ場所かくばしょでもあるのを気づくと、また、そこを一刻も早く去るのをちゅうちよしませんでした。母ねこは、べつに心当たりもなかったから、子供こどもを口くちにぶらさげたままふたび町の方へ引つ返したのです。

秋も末のころで、町の中は、いたつて静かでした。その日は、風もなく、青い空から、太陽たいようが、あたたかに、家々の屋根を照らしていました。母ねこは、窓の開いた、ふとんを干してある、二階家が目につくと、大胆にも塀へいをよじのぼりました。いまは、どんな冒険ぼうけんをしても、子ねこのために、いい場所を探し出さなければならぬと思ったのです。さいわい人がいなかったたので、すぐ座敷へつれてきました。自分も、かたわらへながながと臥ねて、乳ちちをのませました。これが、いつまでもつづくものなら、母子のねこは、たしかに幸福こうふくだったでしょう。普通の飼かいねこなら、ぜいたくでもなんでもないので、二匹ふきには、許されぬ望みのぞでありました。わずかばかりの安息あんそくが、恐ろしいむくいで、仕返ししかえされねばならなかったのです。はしご段を上つてきた、おかみさんが、大騒おおさわぎをして、なぐる棒ぼうを取りにいきました。おかみさんは、宿やどなしねこに入り込まれてはたいへんだ。こんなことが、二度とないように、こらしめるとでも思ったのでしょう。しかし、彼女かのじょ

のもどつたときは、二匹ひきのねこの姿すがたは、もう見えませんでした。

重かさなり合あうように、建たち並ならぶ家いえ々の屋根やねは、さながら波濤はとうのごとくでした。地ちの上うへで
すむことのできないものは、ここが唯一ゆいの場所ばしょであつたかしれません。二匹ひきのねこは、も
う降おりようとしませんでした。ときどき、おびやかすように、ものすごい木枯こがらしが、吹ふ
かなければ、なおよかつたのです。

「おまえは、どこへいつてもいけないよ。じつとして、私わたしの帰かえるのを待まつておいで。」

母ははねこは、こう子こねこにさとしたのでした。高たかい家いえにはさまれて、目め立たない平家ひらやは、
比ひ較かくてき的かぜ風かぜもあたらなければ、日ひが射さすと、ブリキ屋根やねから陽炎かげろうの立たちそ
うな日ひもありました。子こねこが、一ひとり人ある歩あるきさえしなかつたら、ここは、どこよりもいいところだつた
にちがいありません。しかし、いくたびとなく追おわれ、いじめられつづけて、そのたびに
母ははねこが、命いのちをかけて守まもつてくれたのを知しっているので、子こねこは、いいつけにそむくこ
とはなかつたのです。

母ははねこは、後あとに残のこした子こねこのことを心配しんぱいしながら、方々ほうぼうのごみ箱ばこや、勝手かつてもと
あさつたのでした。その苦勞くろうは、けつして、すこしのことでなかつた。いかに氣きが急せいて
も、なにか見みつからなければ、空むなしくは、帰かえれなかつたのでした。

そのうち、塀をかき上る、するどいつめ音がすると、子ねこは、母ねこが帰ったのを知り、つづけさまにないて、ひさしの下から顔を出すのでした。

そのとき、母親のやせた姿が、西日を受けて、屋根へ灰色の長い影をひきました。

毛のつやもなく、脾腹のあたりは骨立っていました。彼女、子供の無事だったのを喜び、

持つてきた餌を与えました。そして、みずからの空腹を忘れたほど目を細くして、

子供の食べるのを見て満足したのでした。

冬の晩には、寒い、身を刺すような北風が、用捨なく、屋根の上を吹きまくりまし

た。母ねこは、子供を壁のすみへ押しやるようにして、自分のからだで、風をさえぎるだ

けでなく、ぬくみであたたためてやったのでした。そのため、子ねこは、安らかに眠ること

ができました。それは、子ねこの生涯にとつても、またどんなに感銘の深いことだ

ったかしれません。

朝、太陽が上ると、母ねこは、また出かけました。霜が真つ白に、雪のごとく、屋根

へ降りていました。その結晶が、ちかちかと、目をさしたのです。子ねこは、身ぶる

いしました。

いきかけた母ねこは、ふりむいて、

「きようは、あとから、いいお天気になるよ。また、遊んであげましょうね。」といいました。

この屋根の下には、どういう人たちが、住んでいるかわからなかったけれど、朝と晩には、若やかに、元氣のある話し声や、笑い声がし、昼間は、まったくしんとしているのを見ると、若い者たちは、どこへか働きに通勤し、老人が留守をするごとく思われしました。たぶん、老人は、一人いるのでしよう、ときどきしやがれたせき声がきこえ、流しもとで水を流す音がしたのでありました。ほかにいたずらをするような子供がいなかったのは、なによりのしあわせでした。

近傍にある、高いかしの木の落ち葉が、風に飛んできて、といや、ひさしの奥に、たまっていました。おりおり、それらが、龍巻きのごとく、おどろ出すことがあります、二匹のねこは、ひさしのすみの方で、風をさけながら、それをながめていました。

ある日のことでした。太陽のよくあたる屋根の上で、母ねこと子ねこが、きげんよく、からかいあつて、遊んでいました。すると、どこからか、

「やせたお母さんの、お乳しかのまないのに、あの子ねこは、よくふとっているのね。」と、いう話し声が、きこえてきました。それは、あちらの高い窓のところで、するのでし

た。こちらを見ながら、一人の少女が、うしろの妹にいったのです。無心でいるのを、おびやかしてはならぬと、二人は、姿をねに見られぬようにしていました。少女は、手に持っていた、パンをちぎりました。とつぜん、なにか音がして、ねこのそばへ落ちました。おどろいた母ねこは、背を円くして、不意の来襲者に備えて、身構えをしました。逃げるより、子供を守らなければなりません。四方を見まわしたけれど、敵らしいものの影はなく、落ちたのは、なんと香ばしい、バターのついたパンではありませんか。「だれが、こんなものを投げたのだろう。」と、疑いながら、母ねこは、高い窓を見上げると、姉妹の少女が、こちらを見て、笑っていました。そのようすで、悪意のないのを悟りはしたけれど、なお母ねこは、油断をせず、餌に近づこうとしませんでした。「あげたんだから、お食べ。」と、少女が、安心させるように、いいました。子ねこはついに我慢がしきれず、パンに近づきました。母ねこは、それを許すごとく、見ていました。そして、自分は、子供にやるつもりか、食べようとしませんでした。少女が、また、パンをちぎって投げました。

「こんどは、あんたにあげるのよ。」

母ねこは、前に落ちたのを、はじめて、静かに口へ入れたのであります。

冬の^{ふゆ}間^{あいだ}じゆう、二匹^{ひき}のねこは、このあたりの屋根^{やね}をすみかとし、終^{しゆう}日^{じつ}、日^ひ当^あたりをさがして、歩^{ある}いていました。そのうち、春^{はる}となるころには、子^こねこは、もうだいぶ大^{おお}きくなつていました。

町^{まち}裏^{うら}に、隣^{となり}組^{ぐみ}の人^{ひと}々^{びと}によつて、耕^{たが}された田^{たん}圃^ぼがありました。そこには、黄^き色^{いろ}の菜^なの花^{はな}が咲^さいていました。他^たの人^{ひと}には、氣^きを許^{ゆる}さなかつた子^こねこも、かわいがつてくれる少女^{しょうじよ}には、なつくようになりました。

そのころ、白^{しろ}い雲^{くも}のあわただしく走^{はし}る、空^{そら}の下^{した}で、子^こねこは、菜^なの花^{はな}にとまろうとする、白^{しろ}い胡^こ蝶^{ちよう}を葉^は蔭^{かげ}にかくれて、ねらつていました。こうして、ふたたび、地^ち上^{じよう}に降^おりても、いままでのように、母^{はは}ねこは、後^{あと}を追^おおうとせず、なるたけ離^{はな}れて、氣^きままに遊^{あそ}ぶ子^こねこを見^み守^もるといふうでありました。

「もう、じきひとりまえになるのだもの、私^{わたし}は、そうついて歩^{ある}くまい。」と、いわぬばかりに、目^めを細^{ほそ}くして、子^こねこが、うまぐちようをとらえるかどうかと、ながめていました。これを、またそばから見^みていた少^{しょう}女^{じよ}は、子^こねこのようすが、あまりかわいらしいので、足^{あし}音^{おと}をたてぬよう、うしろへまわり、いきなり抱^だき上^あげると、ほおずりをしました。母^{はは}親^{おや}は、これも見^みていました。そして、このとき、子^こねこの行^ゆく先^{さき}を見^みぬいたのであ

うか、「ニヤオ。」と、悲し^{かな}そうに、一声^{ひとこえ}高くなきました。そして、その声^{こえ}を残して、どこへとなくいつてしまいました。それぎり、母^{はは}ねこの姿^{すがた}を、このあたりで、見^みなかったのであります。

「お母^{かあ}さん、この子^こねこを飼^かつてちょうだい。」と、姉^{きょうだい}妹^{まい}が、いいはったため、ついにその願^{ねが}いが、かなえられたのでした。

その後^ご、子^こねこは、雨^{あめ}にさらされることもなく、また飢^うえのために、眠^{ねむ}れぬということもなかったのです。

「おまえのお母^{かあ}さんは、どこへいったでしょう。おまえは、みんなから、かわいがられてしあわせなんだよ。きつと、どこかに、おまえのお母^{かあ}さんは、いるでしょうに？」

こう、少^{しょう}女^{じょ}は、子^こねこに向^むかって、いうのでした。たとえ、こうして、向^むかい合^あつていても、そこには、人^{にん}間^{げん}と動^{どう}物^{ぶつ}のへだたりがありました。考^{かん}え方^{かた}にも、ちがいがあるとみえて、畢^{ひつ}竟^{きやう}なにをいつても通^{つう}じなかつたのが、少^{しょう}女^{じょ}には、悲^{かな}しかったのです。

いよいよ冬^{ふゆ}が去^さるのか、あらしの吹^ふき荒^{すさ}んだ夜^{よる}のことでした。風^{かぜ}は、空^{そら}から、屋^や根^ねの上^{うえ}を吹^ふきまくり、窓^{まど}の戸^とへつき当たりました。じつと、耳^{みみ}をすました子^こねこは、急^{きゆう}にいらい

らしだして、へやじゆうを騒ぎまわり、外へ出ようと思いました。

「なんだかようすが変だから、早く出しておやり。」と、お母さんまでが、おつしやいしました。姉のほうの少女が雨戸を細目に開けると、すきまから、烈しい風が、内へ吹き込みました。

「この風の中を、どこへいくの？」と、少女が、いいました。子ねこは、闇の中へ飛び出して、さまよいながら、目に見えぬ影を慕うごとく、悲しい声で、なきつづけました。「ああ、きつと、母ねこのことを思い出したのかわ。」と、姉と妹は、顔を見合わせました。

あの屋根から、屋根を、子供をつれて歩いていた、やせた母ねこの姿が、二人の目にはつきりと浮かびました。

子ねこは、遠くの方まで、母を捜しにいったとみえ、風のどぎれに、そのなく声が、かすかにきかれました。かつて、寒い、寒い、木枯らしの吹く夜、そして、霜のしんしんと降る夜明け方、母ねこに抱かれて、安らかに眠った、なつかしい記憶が、はしなくも風の音によって、思い起こさせられたのでありましょう。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「童話」

1946（昭和21）年7月

※表題は底本では、「どこかに生《い》きながら」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年7月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

どこかに生きながら

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>